

# 12 よく聞かれるアイヌ民族に関する単語

## 01 アイヌ

(アイヌ民族・和人について アイヌ・和人という言葉 3 頁を参照。)

## 02 差別

観光と民族共生の両立には、差別・ハラスメントについて知ることと定期的な協議や振り返りが必須です。不用意な解説は、ガイド者の意図に関わらず、差別を助長し拡散することになります。

差別・ハラスメントをめぐるのは「する側」と「受ける側」の、2つの立場があります。「受ける側」の不快感が、する側にとっては意識されないことも珍しくありません。

「差別は減った／なくなった」というとき、そこで思い浮かべられているのは「直接的な暴力」や「見下し」、「排除」でしょう。そうした差別は潜在化して続いており、またいつでも起こりうるリスクが社会全体にあります。そのほか、自分たちの感覚・価値観を当然のものとして押し通すこと（同化強要）、過剰に誉めそやすこと（聖化）も、他者を対等な相手と認めない態度です。

また、差別・ハラスメントに直接かかわらなくても、被害を否定することで間接的に「する側」に立ってしまうことがあります。これによって負う傷や絶望感、直接的な加害によるものと同じくらい大きく、共生や協働の大きな妨げとなることを知ってください。

以前に比べて「差別が少ない」と感じる人が多いのは、表面的な差異が減りトラブルになることが少なくなってきたためでしょう。アイヌ民族らしさという、一般には「外見・体質」、「言葉・服装・習慣」、「血筋・出身地」などを思い浮かべるようです。

服装や言葉、習慣などは場面によって使い分けることができますし、外見でさえ、和人からの蔑視を避けるために、変える努力がされてきました。人の移動が加速し、民族や国籍を超えた結婚が増えたことで住む場所や体質も多様化しています。

差別の否認は「アイヌ民族に会ったことがない（当事者はほとんどいないのではないか）」、「堂々としていないから変な目で見られる」という形をとることもあります。こうした言葉には、当事者の思いを想像・共感する意思是感じられず、溝を広げるばかりです。

また、差別はあってはならないと誰もが知っている一方で、現実にはいたるところで差別が起こります。こうした現実の社会への不安や、問題に向き合うストレスを和らげるため「被害者にも原因がある」、「加害者は異常だ」等と、問題を「個人的なこと」や「ささいなこと」とする「考え方のクセ」が広く見られます。これも、差別が見過ごされる一因です。

「差別がある」と言われると違和感のある人も、日本社会が和人中心にできていると言われれば、少し理解しやすいのではないのでしょうか。「和人を中心・標準とする」のが当然だとする社会・組織の在り方は、和人でない人にとっては居心地の悪さを生みます。

一例をあげれば北海道の「開拓」を手放しに礼賛することは、和人にとっては自然に思えても、立場が変われば他者への配慮を欠いた行為に映るのです。

国際的協調が重要な今日の状況を考えるまでもなく、日本国の版図とされる領域にはもともと多様な人々がくらし、いまでも多様性を大切にしています。これは和人も同様です。多様性を許容する社会とは、少数者にも配慮する社会にとどまらず、究極的には誰にとってもくらしやすい社会なのです。

観光には「ゲスト（訪ねる人）」、「ホスト（受け入れる人）」、「ガイド（両者をつなぐ人）」という3つの立場があります。アイヌ民族に関する観光では、ガイドは和人の事業者やアイヌ民族の富裕層、ホストがアイヌ民族と近親者であることが多く、両者が労使の関係にある場合もあります。1997（平成9）年のアイヌ文化振興法以降は、文化普及イベントを主催する行政や受託業者がガイドの位置に立つことが増えました。

ガイドは、土産品やアイヌ民族のイメージなどを商品として勧める立場ですが、ホストにとっては自分の身に着けた物やイメージだけを自己と切り離して商品とすることは難しく、いわば生身の体、全人格をゲストの前に提示することになります。

こうした立場による違いは、これまであまり認識されずにきました。さらに商品価値を生むために、ガイドがアイヌ民族・文化の神秘性や自然との結びつき／原始性を強調する場面が見られます。特に「毛深さ」など、容姿の「特徴」を珍

奇なものとして売り込むことは人権上の問題が大きく、批判を招きました。しかし、そうした在り方への反省が叫ばれて久しい今日でも「濃い顔」や「ひげを生やした」人物がモデルに選ばれるなど、同種の手法は相変わらず生きています。

観光や普及事業に携わるすべての人は、「珍しさ・面白さ」と「差別性」が裏表の関係にあること、発信内容の決定には、ホストの主体性と十分な了解が重要であることを理解する必要があります。

ガイド・解説の場で、具体的にどうするのが良いかということは個々のケースに照らして考えるしかありません。意図せずに差別的なガイドをしてしまうことを避けるため、検討の目安として巻末の「ポジティブチェック・ネガティブチェック」を試してみてください。

### 03 単一民族国家

明治期の日本には、「単一民族論」と「混合民族論」という2つの考えがありました。「単一民族論」は、日本国が1つの人間集団・1つの文化によって構成されてきたとする考え、「混合民族論」は日本列島に歴史上幾度も人の移住があり、在地の人々と渡来人が融合して今の日本人となったとする考えです。混合民族論は実態に即しているという点は評価できますし、博愛主義につながる可能性もありますが、実際には植民地主義と結びつき、アジアや太平洋の諸民族を「日本人」として取り込む政策を理論面で支えることになりました。「日本人になる」とは言語的・文化的に和人に同化することでした。

そうして他の民族を取り込む一方、排外主義やアジア諸地域を蔑視する感覚も強く、強引に「日本人」に取り込んだ人々を見下し、差別することが常態化していました。

敗戦によって沖縄と《ヤウンモシリ》(北海道)以外の植民地を失うと、日本による加害の歴史は忘れられ、排他性も強まっていきました。こうして、国民すなわち日本民族であるとする意識が広まり、公人でさえもしばしば「日本は単一民族の国だ」などと発言することがあります。これは、史実に合わないばかりでなく、植民地主義への反省や、その結果として今日も排外主義にさらされている国内の民族的マイノリティへの配慮を欠いた、きわめて不適切な発言です。

2019(令和元)年5月に施行されたアイヌ施策推進法では「差別の禁止」に言及しており、差別の例としてアイヌ民族はいないなどと発言すること(=単一

民族国家論)などがあげられています。法律の制定はたいへん重要ですが、これに加えてこうした発言をしてしまうマジョリティの心理構造を明らかにし、そこを変えていくなど実効性のある対策をする必要があります。

なお、こうした植民地主義や排外主義に起因する問題は、日本国内だけの問題ではありません。国連では、様々な国の中の先住民族が、失った権利を回復すること、あらゆる人権を保障するための話し合いが進められています。アイヌ民族と日本政府もこの協議に参加しています。(アイヌ民族・和人について 先住民族 4 頁を参照。)

## 04 無文字社会

(歌や踊りと口承文芸について 文芸について 68 頁を参照。)

## 05 酋長

現在、酋長という言葉が店名などに使用していることがありますが、日本語の本来の意味が「未開の部族の長」という意味であり、差別的な意味を含む言葉です。また、若年齢層にはなじみのない古語になっています。

「村長」「首長」を意味する《コタンコロクル》というアイヌ語や、集落のリーダー、代表者という言葉を用います。

《コタンコロクル》は、その村の草分けの家系から選ばれる場合や、互選によってえられるケースがあります。

## 06 熊送り(熊祭り)

アイヌ民族にとってヒグマは、自分たちと深い関わりをもつ《カムイ》(神)の一つです。冬眠明けの春先に巢内で生まれたばかりの子熊を手に入れたときは、「神々から一定期間の飼育を任せられた」と考えて、その名誉ある役目を喜びます。

一年後に、大切に育てた子熊の魂を肉体から分離させ(=結果的にこれが「殺す」という行為)、その魂を神界の親元へ送り届ける儀式を《イオマンテ》(イオマンテとも表記する)と言います。

日本語では「熊祭り」と訳されることも多いですが、儀式の本来の目的からす

ると「熊送り」「熊の霊送り」さらに丁寧に「飼育した子熊の霊送り」ということになります。

人間がお土産を持たせて丁寧に親元に送った子熊の魂は、他の神々を招いて酒宴を開き、山中で人と出会ったときからの様子を話して聞かせるといわれています。そこでは、人間が子熊である自分をいかに手厚くもてなしてくれたかが話題となり、話を聞いた他の神々は、自分も人間界に行ってみたい、人間に捕えられて丁寧にもてなしを受けてみたい、と思うようになります。

そうして別の神が実際に人間の国にやってくる時、人からヒグマへと姿を変えます。人間から粗末な扱いを受けるのは親として忍びないので、丁寧に扱ってくれる人間を選びます。その結果、最初に子熊の魂を丁寧に送った人間は、再び山の中で別のヒグマに会い、そのヒグマを捕獲し、肉や毛皮を手にすることができるようになります。その魂を再び丁寧に親元に送ることで、さらに良い循環が繰り返されることになり、獲物を授かったとき、神々に感謝することが、さらに次の狩猟につながるのです。動物の肉や毛皮は人間がありがたく利用し、粗末にせず無駄なく使います。尊い魂に向かって、精一杯の気持ちを示すのです。

こうしたアイヌの精神文化を理解しないと、《イオマンテ》に対して「ヒグマを殺すのは残酷だ」、「生贄にしている」などとの外れな感覚を持つことになります。自己の感覚や常識と合わない文化であっても、その成り立ちや背景にある価値観を考えずに否定することは、たいへん乱暴な行為です。

なお、伊藤久男の「イヨマンテの夜」という有名な歌がありますが、この歌には実際の《イオマンテ》とは関係のない「太鼓」や「かがり火」などが歌い込まれています。こうした誤った認識を広める行為だけでなく、他文化における神聖な儀礼、ひいてはそれを生み出した人々を軽視する姿勢にこそ問題があります。

## 07 アイヌネギ

正式名称はギョウジャンニク。「中国茶」「タイ米」のように国や地域の付いた呼び名は多く、その意味ではアイヌ民族の長年の食材のひとつをアイヌネギと呼ぶこと自体は、本来は悪いことではありません。

しかし、「アイヌは汚い、くさい」などというアイヌ民族に対する差別と、強い匂いをもつギョウジャンニクを結びつけてこの名称を用いる者もあり、このような状況下でアイヌネギという呼称を用いることに不快感を持つ人が多くいます。

従って、こうした差別が解消されるまでは、アイヌネギという言葉は避け、ギョウジャンニクと呼ぶ方が良いでしょう。

なお、《ヤウンモシリ》(北海道)内のスーパーなどでは「キトビル」「ヒトピロ」等の名称で売られていることもあります。(どちらも日本語の「祈禱びる」からきています)。

## 08 アイヌ犬

アイヌネギと同じで、本来的には悪い言葉ではありません。しかし、長い差別の中で「アイヌは人間ではなくて犬以下だ」と言われたり、アイヌ民族を指して「あ、イヌが来た」などとからわれることが現在も続いているため、アイヌ犬という呼び方を快く思わないアイヌ民族が多くいます。現在は北海道犬という呼び名が一般的です。

## 09 アイヌ勘定

「アイヌ民族は数字の数え方も知らない、和人より劣った民族である」ということを連想させるために、まことしやかに作られた言葉で、軽々しく使うべきではありません。最も典型的な話は「和人がアイヌ民族と交易をする時に、サケの数を、始まり、1、2～10、終わりと数えて12匹分を手にしなが、10匹分の金しかアイヌ民族に払わない。それでもアイヌ民族は数の数え方を知らないから、だまされてもわからない。そうやって、昔の和人はアイヌ民族をだました」というものです。こうした「はじまり」「終わり」を前後につける数え方を、古くからアイヌ勘定と呼びます。「始まり、1、2～5、真ん中、6、7～10、終わり」で13匹という数え方もあります。

この話は、聞く者に「昔の和人はアイヌ民族をだまして、ひどい」と思わせる一方で、「アイヌ民族は数字を知らない」ということを強烈にイメージさせます。

和人の側にだます意図があったのではなく、商習慣だという説もあります。サケを本州に運ぶのに長い船旅では傷みやすいので、あらかじめ2割増の取引が当時の商い習慣として一般化していた、という説もあります。

一方、ある女性は、複数の和人の男性と対峙した状況で、こうした数え方をしたので抗議しようとしたのですが、同行者に「危ないから」と止められたという体

験を語っています。威圧によって抗議を封じながら、このような不当な取引をするのは一種の恐喝であり、「アイヌ勘定」の実態はこういうことだったのかもしれない。また「だまされてもわからない」というのは、そういうふりをしていただだけで、アイヌ民族の寛大な心の表れだという人もいます。

「アイヌ民族は数の数え方を知らない」というのはもちろん誤りで、アイヌ語には数を表す言葉があります。《ヤウンモシリ》(北海道)の多くの地域では、10から19までは10進法、20以上になると20進法を使います。樺太方言は、20進法もありますが、10進法をよく使います。

アイヌ勘定と別に、大雑把に数えることを表す「めのご勘定」という言葉があります。もとは「目の子勘定」(そろばんなどを使わずに、目で見ながらおおよその計算をすること)という日本語ですが、アイヌ語で女性のことを《メノコ》というので、「メノコ勘定」=いい加減な数え方、という差別的な言葉として使われることもあります。

## 10 ニポポ人形

《ニーポポ》はアイヌ語で「木の小さな子」を意味します。樺太アイヌが使っていた人形です。子どもが病弱であるとき、無事に成育することを願って子どもを守護するための人形が作られ、祀られました。これらは同時の子どもの玩具である場合もあります。

人形に限らず、子供の誕生や成育を願って仕事道具や宝物のミニチュアなどが作られることがあります。こうした模型は、鑑賞の対象やおもちゃにもなりえるもので、これらは今日の感覚でいう「お守り」や「おもちゃ」とは違った見方ととらえられていた可能性もあります。

なお、現在、土産品として売られているニポポ人形は、戦後、この人形の存在を知った網走市立郷土博物館初代館長・米村喜男衛氏の発案で、網走刑務所の受刑者による木工品製造作業のひとつとして作られ、広まったとされています。

## 11 イナングル

「どの人、どなた」という意味のアイヌ語です。

童謡「ピリカの歌」の中の歌詞の一節にもあり、比較的知られた言葉です。商店が来客の関心を引き購入させるため「幸せを呼ぶ神」という虚偽の解釈を付して販売したことから、いつしか商品名として使われるようになってしまいました。

## 12 ピリカ

「良い、美しい、立派な」という意味のアイヌ語。童謡「ピリカピリカ」、また「知床旅情」の中の〈～ピリカが笑う〉という歌詞から、一般にもよく知られています。しかし、「知床旅情」の歌詞の影響で、「ピリカ」の意味を「女性」、または「アイヌ民族の女性の名前」と受け取られていることもあります。

## 13 モシリ

「大地」、「島」、「国」という意味のアイヌ語です。《アイヌモシリ》というのは、「人間の（暮らす）大地」という意味で、はるか天上にあるといわれる《カムイモシリ》「神々の（暮らす）大地、神の国」と対（つい）になる言葉です。北海道島は「陸の国」を意味する《ヤウンモシリ》の名で呼ばれてきました。また、北海道を指して《アイヌモシリ》と呼ぶこともあり、この場合は「アイヌ民族の土地」という意味合いで使われます。

阿寒湖、屈斜路湖を中心に活動するアイヌ詞曲舞踊団「モシリ」の名称も、このアイヌ語に由来しています。

## 14 エカシ／ヘンケとフチ／アハチ

《エカシ／ヘンケ》はおじいさんのことで、自分の祖父の他に、年老いた男性に対しても尊敬の気持ちを込めて使います。《フチ／アハチ》はおばあさんのことで、同じく自分の祖母の他に、年老いた女性への尊敬の気持ちを込めた言葉です。アイヌ民族は、お年寄りを豊富な知識と経験を持つ知恵袋、生きた百科事典として、非常に大切にしてきました。

## 15 チセ

(人々の暮らし 住む 65 頁を参照。)

## 16 ト

沼や湖を表すアイヌ語です。阿寒湖近くのオンネトー、パンケトーのように、慣習的に「トー」と伸ばして書かれることがありますが、アイヌ語は「ト」でも「トー」と伸ばしても、意味の変化が起こりませんので、伸ばさずに「ト」と書くのが一般的です。オンネトー、パンケトーはそれぞれ《オンネ》(大きな)《トー》(湖)、《パンケ》(川下の)《トー》(湖) という意味の地名です。

## 17 月と太陽

アイヌ語で空にある丸いもの(月と太陽)を《チュプ》といいます。太陽は、《トカプ》(昼の)をつけて《トカプチュプ》と呼び、月は《クンネ》(暗い・夜)をつけて《クンネチュプ》と区別して呼びます。どちらも神様なので、《チュプカムイ》(太陽の神)、《クンネチュプカムイ》(月の神) という言い方もあります。

本州では、月の中の黒い陰影を「ウサギが杵を持って餅をついている」と言いますが、アイヌ民族には次のような物語が語り伝えられています。

「祖母と二人暮らしの少年は、怠け者で家の手伝いも大嫌いでした。ある夜、祖母から近くの川へ水汲みを命じられた少年は、いやいや手桶とひしゃくを持ったものの、すぐには家の外へ出ようとせず、家の柱や炉縁をひしゃくで叩きながら、散々に文句を言ったあげくに、渋々と川へ向かいました。それを天から見ていた神が、怒ってその少年を月に召し上げて、怠け者への見せしめにしました。だから今でも満月の日、月の表面には片手に手桶、片手にひしゃくを持った少年が立っているのが見えるのです」。

この話をアイヌ語で伝承していたアイヌ民族のおばあさんは、子どもの頃、満月の夜に外でこの話を親から聞かされたそうです。

## 18 ペツとナイ

《ペツ》は川そのもの、《ナイ》は水流によって削られた沢の地形を表します。アイヌ民族は、かつて河川流域に生活基盤を置いていたことから、地名には《ペツ》や《ナイ》という言葉が数多く使われ、現在でも登別、紋別、稚内、静内など市町村名にもなっています。

## 19 シシャモ

(人々のくらし 55 頁を参照。)

## 20 サケ シペ/カムイチェブ

サケを《シペ》と呼び、これは《シ・イペ》(本当の食べ物)が縮まった言葉だと言われます。

また、《カムイチェブ》とも呼びますが、穂別、厚真、屈斜路、白糠、美幌など《ヤウンモシリ》(北海道)各地や《ヤンケモシリ》(樺太)では、遡上する群れの先頭や特別な外見を持つサケを《カムイチェブ》と呼びます。《カムイ》は神、《チェブ》は魚を意味します。

秋になると河川に遡上してくるサケは、文学中では「川底のサケは石が腹をこすり、水面のサケは陽の光で背中がこげる」ほどにひしめき合って川を上ってくると描写され、豊かな恵みをもたらしてきました。捕獲したサケは、生で食べたり、焼く、煮るなどの方法で新鮮な味覚を楽しむ他、多くは保存材料として蓄えられました。サケの皮は靴や着物の素材とし、ニカワやゼリーを作るなど、捨てるどころなく多様な用途に使われました。

サケとシカは食物の象徴としても語られ、遡上の前には豊漁を神々に願う儀礼を行い、また最初にとれたサケは客人としてもてなす儀礼を催してきました。現在、札幌市をはじめ道内各地では、こうした先祖の精神を継承していこうと、新しいサケを迎える儀式を再現、復活させています。

(人々のくらし 47 頁を参照。)

## 21 ルイベ

伝統的なサケの食べ方のひとつです。新鮮なサケの内臓を取り出した身をそのまま凍らせて、食べる直前にさっと火にあぶって皮をむいたりやわらかくして、刺し身のように薄く切り、とけかけたものを食べます。凍結と解凍を繰り返すと、水分が抜けて食感が変わります。自分の好みの歯ごたえになったところで食べると、とてもおいしいものです。アイヌ語で、《ル》はとける、《イベ》は食べ物という意味です。

現在では、アイヌ民族だけでなく、道内各地の料理店でもメニューに加えられるなど、《ヤウンモシリ》（北海道）の郷土料理のひとつになっています。

なお「ルイベは「魚」を意味するロシア語だ」という説も聞かれます。しかし、魚一般をさす言葉が「凍結した生のサケ」を指す名称として定着したとする解釈は説得力に欠けますし、ロシア料理は魚の生食を避ける傾向にあるとも言います。音が似ていることから着想した類推でしょう。

## 22 ウポボ

（歌や踊りと口承文芸について 67 頁を参照。）

## 23 ムックル・ムフクン・ムフクナ

アイヌ民族の楽器で、日本語で口琴と訳されます。口琴は、本体に作りつけられた弁を振動させ、その音を口の中で反響させることで音量や音色を変化させます。こうした楽器はユーラシア大陸と周辺の島嶼部各地にあり、金属製や竹製、木製、骨製のものが知られています。日本でも江戸時代に大流行し、その音色から「びやぼん」と呼ばれて庶民に親しまれました。余りの熱狂ぶりに、禁止令が出たという記録も残っています。

《ムックル》は竹製や鉄製のものがあり、伝統的には風や動物の声など、自然音を模倣した様々なモチーフを変化させながら演奏します。近年では、即興的に様々な音色を組み合わせる演奏も盛んにおこなわれています。各地域の古式舞踊保存会などで演奏されるほか、地域によって《ムックル》に特化したサークルもあり、《ムックル》大会も開かれています。

## 24 トンコリ

アイヌ民族の弦楽器のひとつです。主に《ヤンケモシリ》(樺太)から《ヤウンモシリ》(北海道)北部のアイヌ民族が使用してきたもので、日本語では「五弦琴」と訳されます。長さ1m強、幅は約10cm、厚さは約5cm。座った状態で、肩に立てかけたり頭部を左にして抱きかかえたりしながら、弦を弾いて演奏します。

《ヤウンモシリ》(北海道)での演奏は、江戸時代の文献には記録があるものの、演奏内容はすべて途絶えてしまいました。現在は、《ヤンケモシリ》(樺太)東海岸の伝承を中心に普及が進んでいます。また、30年ほど前から、新しいアイヌ音楽への取りこみが盛んにおこなわれ、CDも作られています。

## 25 チャランケ

利害の対立が起こると、暴力ではなく、討論による解決が図られました。当事者あるいは代理人が主張を交わし、納得のいく解決方法をさぐっていったと言われています。こうした討論をアイヌ語で《チャランケ》(談判)と言い、言葉に詰まったり、激高してしまうと敗北となります。

《チャランケ》(談判)の言葉は、祈り詞などと同じ文体の韻文形式に整えられ、旋律に乗せて唱えられます。冗長や婉曲な表現を多く含み、格調高い言葉で相手の出方をうかがいながら論理の破綻を誘うなど、高度なテクニックを含みます。

《チャランケ》(談判)に勝利した者は、倫理的に正しいだけでなく、知性に富み弁舌巧みであることを周囲に印象付けることとなります。名勝負として知られる《チャランケ》(談判)は、紛争の状況と勝者の弁舌がそろって伝承されました。中には、19世紀前半に遡る時期の狩猟権をめぐるやり取りが、《チャランケ》(談判)伝承の一部に語られていた例もあります。こうした言葉は、アイヌ社会の慣習を内から語る貴重な資料ともなり、たいへん興味深いものです。

日本語の北海道方言に「人に文句を言う、言いがかりをつける」などという意味で「チャランケをつける」ということがあります。また「腹を割って徹底的に話し合う」という意味で《チャランケ》(談判)が使われることがあります。こうした使われ方には、《チャランケ》(談判)の舌戦にただよう格調高さや緊張感などが感じられず、よくも悪くもアイヌ民族を「素朴な」者にとらえる思潮がうかがえます。

## 26 ニシパ

「長者、物持ち、旦那、大人」などと訳されることが多い言葉です。社会人として一人前で何不自由ない暮らしを送ることのできる男性、そうした地位にある人、人々から敬愛される紳士などを指します。平取町では地元名産のトマトを使ったジュースに「ニシパの恋人」という商品名をつけています。

## 27 春夏秋冬

春＝《パイカラ》、夏＝《サク》、秋＝《チュク》、冬＝《マタ》

このようにアイヌ語には四季にあたる言葉があるほか、春夏を合わせて《サクパ》、秋冬を合わせて《マタパ》とも呼びます。

## 28 カムイパボニカアーホイヤ

観光産業にもなって流布した和製アイヌ語の一つ。元になっているのは霊送りの場で歌われる「カムイ ホプニ ナ、アーホイヤ、ホー（神が旅立つぞ、それ）」という歌のようです。

歌の言葉を少しもじって「明日天気になあれ…」といった「おまじない」のように説明されていますが、このようなアイヌ語はありません。